

## TOPICS 今号のトピックス

- 公開セミナー ラジオを楽しむ! 大阪開催
- 夏休み終戦企画『被爆地・ヒロシマと平和への祈り』
- 夏休み 各種体験教室&「赤毛のアンと世界名作劇場の仲間たち」展ほか
- 上川前総務副大臣が放送ライブラリーを視察

## ■公開セミナー ラジオを楽しむ! 大阪開催

9月7日、公開セミナー「ラジオを楽しむ!」の第4回～ラジオでしか描けないテーマを求めて～を、大阪のABCホールで開催した。取り上げた作品は、平成25年度日本民間放送連盟賞最優秀ほか各賞を受賞した毎日放送と朝日放送の2番組。両番組共、ラジオならではの可能性を追求し高い評価を受けた。会場では、放送部に所属する高校生、メディアを専攻する大学生、ラジオ好きのリスナー、ラジオ制作者など、10代～80代まで幅広い層の参加者、約180名が熱心に耳を傾けた。



[登壇者] 森崎俊雄 (毎日放送)、鈴木崇司 (朝日放送)

[司会] 石井 彰 (放送作家)

[鑑賞作品]

報道特別番組「原発作業員が語る2年」

(2013.3.31放送 / 59分 / 毎日放送)

福島第一原発で過酷な労働に従事する原発作業員の証言を伝える事で、原発といかに向き合うのかを問いかけた。長期的な丁寧な取材で作業員一人一人の生の声を引き出した。ラジオだからこそ出来た説得力のある作品。

調律師という芸術家 ～最高の音楽を作る究極のピアノ

調律 (2012.12.9放送 / 56分 / 朝日放送)

世界的なピアニストが信頼する調律師に密着。調律師という職業の特異性を紹介すると共に、「究極の調律」を音の変化で伝えるため高音質の録音を成功させた。音楽の魅力に誰もが近づける、まさにラジオは音だと感じさせる番組。

最初に2作品をじっくり鑑賞。このような形で集中してラジオの番組を聴く機会はほとんど無いため、参加者から

「聴覚に神経を集中させるのは疲れたが、新鮮な経験だった。」「多くのリスナーと一緒に番組を聴く時間を共有出来て良かった。」などの声が上がった。

映像がないラジオは言葉と音の二つだけで伝えるしかない。番組制作にあたり森崎氏は「どの部分を番組に出し、どのような原稿を書くか、スタジオでどう喋るか、どのように表現をしたら一番伝わるかという事には非常に気を遣っている。」という。また「ラジオでは、言葉だけで細かい数字を表現するのは難しい。今回の番組では、最小限の数字を出しながら、実際に働いている人が、その値をどう受け止めているのかを最大限出す事で、表現したいと思って作った。」「原発の作業員の事は、なかなか報道されない。最初は、上田崇順アナウンサーが取材に行っても、ラジオでもなかなか喋ってくれない。物凄い苦勞をして音を集めた。聞いてみると、これを放送できるのかと思う信じられない話が出てきた。作業員の人達の証言を積み重ねていき、放送できるところに落とし込むまで、非常に時間がかかった。」と制作の苦勞を振り返った。



鈴木氏は、今回の番組制作にあたり「まず音楽の専門用語は使わないと決めた。音階の分かれ目である2度とか3度とかいう言葉も倍音という専門用語も消した。調律師の



菊池さんやピアニストの岡原さんが話す言葉には専門用語は入っているが、それがわからなくても通じるようにした。」と振り返った。番組に出演した調律師・菊池和明氏が会場から「鈴木さんをレクチャーする事から始まった。倍音とは何かから教えた。ビジュアルがない世界で僕らの仕事を紹介すると聞いた時には、本当に曲や音色の違いが分かるのかと思ったが、やってみたら素晴らしい番組になった。」と述べた。また、鈴木氏は「僕自身が“なんで?”という疑問符のある

まま番組を進め、解説の大田美佐子教授に、その疑問に専門用語は使わないで答えて貰うようにお願いした。僕が大田さんにレクチャーを受けるのをそのままスタジオでやって貰ったようなもの。」と加えた。鈴木氏自身がリスナーの代表として生徒になって教えて貰った事が、多くの人にわかりやすく伝わる番組になった。

司会の石井氏が「ラジオの歴史は来年で90年。放送局の数は増えたが、同じような番組が多くなってきている。



この放送局のこの人にしか作れないという番組を作って貰いたい。」と述べると、森崎氏が「テレビでは映せない、テレビでは満足できないという事をどこまで番組に出来るか、テレビの枠を超えたラジオの個性を持った番組を作らないと駄目だと思っている。」と応えた。

鈴木氏は「今回の番組を作る前に、調律師を扱った映画を見た。映像があると調律師の作業に目がいってしまい、音が聞こえなくなる。目の情報の方が圧倒的に多いので、そこで落ちてしまう情報を拾い上げる事がラジオで調律師をやるという事。だからあれだけしつこく聴き比べをした。目で落ちてしまう情報を耳で繰り返し伝えれば伝わる。」と話す、石井氏が「映像があるとそちらに流れてしまう。調律

という音の世界ではなく、調律師の手先がどうだとか他の事に意識がいってしまう危険性がある。作業員の場合は、服装はこうなのだとか、こういう場所で話を聞いているのかなど、余分な事に意識がいき作業員の一人一人が語る真実に耳がいなくなってしまう。」と続けた。

ラジオの利点や魅力について、鈴木氏は「ラジオは自分から行動して貰うためのきっかけづくりになる。調律、原発問題という事をきっかけとして、わかった気になり、“こうなのだろうな”とインターネットで検索するなり、図書館へ行って本を借りるなりの行動を起こして貰うスタートになるものだと思う。テレビは見て終わってしまう。」森崎氏は「リスナーが直接参加できるメディアだと思っている。ラジオというのは生番組が多く、聴いている人が“これを聞きたい”“突っ込みが足りないぞ”という時に、どんどんメールで質問できる。社会にとって“私はこう思う”“ああ思う”という事を直接的にそこで議論ができる、話ができる。そういう意味で、ラジオというのは独特なメディア、これが魅力だと思っている。」と語った。

質疑応答では、どうやったらラジオに向けたテーマを探せるのか？ 地域へのこだわりや地域に向けてという事は意識しているのか？インタビューのコツは？など、制作者への積極的な質問が会場から次々飛び出し、ラジオのセミナーらしい制作者と視聴者を繋ぐ有意義な会となった。

## ■夏休み終戦企画『被爆地・ヒロシマと平和への祈り』

### 上映会、ポスター展示、紙芝居の多彩な企画で開催



当センターでは、終戦から69年目に当たる8月15日から17日まで、夏休み終戦企画『被爆地・ヒロシマと平和への祈り』と題して、関連

番組の上映、「原爆の子の像」のモデル・佐々木禎子さんの一生を伝えたポスター展示、禎子さんの話を読み語りで各地を回る、佐治麻希さんによる紙芝居の実演とお話などの内容で、放送ライブラリーと同じビル内の情文ホールで開催した。

番組上映会は、NHKと民放の広島被爆と核汚染問題を、アニメーションや平和学習などを取り入れた内容で、NHKの『NHK特集 夏服の少女たち～ヒロシマ・昭和20年8月6日～』と『NHKスペシャル ヒロシマに一番電車が走った 300通の被爆体験手記から』、テレビ朝日『はだしのゲンは忘れない～チェルノブイリの子もたちとの約束』、静岡第一テレビ『'09ドキュメント静岡 ニになる前に』、広島テレビ『NNNDドキュメント'02 伝説なんかじゃない～2002・ヒロシマ・SADAKO～』の合計5番組を上映した。

今回は、小中学生など児童にもわかりやすく、戦争と被爆の悲劇と平和の大切さを学んでもらう目的から、番組内容の他、2歳で被爆し、わずか12歳で白血病により短い人生を終えた

佐々木禎子さんの一生と「折り鶴のメッセージ」をテーマに選び、広島平和記念資料館から借用した26枚のポスター展と紙芝居で紹介した。

この催しには、3日間の延べ人数で大人285人、子供101人が参加した。親子連れや横浜市内の学童グループの参加もあり(左写真)、2・3本を続けて視聴する熱心な参加者も多かった。参加者からは、「子供の夏休みには続けてほしい」「大変貴重な機会をありがとうございました。親子連れが何組かいたのには安心しました」「サダコと折り鶴展は感動しました。戦争の無残さが大変恐ろしく感じます」などの感想が寄せられた。

今回の企画に際し、広島被爆をテーマにしたテレビ公開番組リスト『テレビはヒロシマをどのように伝えたか』を作成し参加者に配布した。リストは、ドラマやドキュメンタリーなど400本を超える公開番組のジャンル別・放送日順で、番組概要やキャスト・スタッフ、受賞歴も記載されている。

### 紙芝居“折り鶴の祈り”と平和メッセージ

8月17日の午後、静岡県伊豆市の妙蔵寺住職の佐治麻希さんから紙芝居とお話を聞く催しを実施した。佐治さんは、一人娘であることから出家を決め、修行の傍ら、10年以上に渡って、禎子さんの物語を伝えるために、手作りの紙芝居の読み語りで、被爆地の広島や長崎の他、各地の小学校や集会を回っている。

最初に、佐治さんの活動の様子を紹介した、『'09ドキュメン



ト静岡 尼になる前に」を上映した。佐治さんは、紙芝居の前に、禎子さんの物語との出会いや活動の様子を語った。「小学校2年の頃

頃に読んだ、金の星社『つるにのって』が縁で、禎子さんのことをもっと学びたいと思い、家族で広島に初めて行き、『原爆の子の像』や禎子さんが折った折り鶴を見た。原爆資料館で、オーロラ自由アトリエ発行の『さだ子と千羽づる』という絵本を見て、禎子さんの紙芝居が生まれました」と紹介した。

各地で読み語り続ける中で、2011年3月の東日本大震災と原発事故の後、活動が辛い時期だったという。「一瞬にして多くの尊い命が失われた。そして今、深刻になっている放射能の問題は、『放射能が危ないから外出はやめよう』、『この食べ物は何が入っているか分からないから食べるのはやめよう』という恐怖心だけが残ってしまったら、禎子さんの気持ちが伝わるのが半分になってしまう。読み語りがとても辛い時期があったが、『佐治さん、こんな時代だからこそ、禎子さんの話をして下さい』と、先生や保護者の方々が励まし声をかけてくれた。真の復興は、お一人お一人の心の復興から始まっていくと思うので、多くの人たちに禎子さんの純粋な思いを一所懸命に伝えていきたい、それが私のお役目ではないか」と語った。

続いて、高校生時代に視覚障害者の方でも触って分かるように、点字と和紙を使って立体的な画面に作り変えた点字絵本『つるのいのり』の読み語りを始めた。(上写真)

紙芝居の最後に佐治さんは「禎子さんの心は、モンゴルにも伝わり、“ヒロシマの少女の折り鶴”という唄が、愛唱歌として歌われています。あなたも一緒に平和の鶴を折ってみませんか」と結んだ。

### ニューヨークでの読み語りで思ったこと

佐治さんは、2010年5月、ニューヨークの国連でのNPT再検討会議の開催に際し、各宗派から成る「日本宗教者平和協議会」のメンバーと共に、紙芝居をもってアメリカに渡った。その時のエピソードを交え語った。「教会での読み語りの折、第2次大戦を体験したアメリカ人女性が、『あなたは紙芝居で物語を伝えているのではないのね。禎子さんの心を伝えているのね。私は日本に原爆を投下したことは間違っていたと思う。本当にごめんなさい』と謝られた。平和を祈る根底には、被害者だ、加害者だ、と主張し合っているは何も解決しない。互いに認め合い、許し合いの心がなければ和解することも難しい。許し合いの心で、紙芝居を続けていこうと思っています」と語った。

もう一つのエピソードは、9・11同時多発テロの跡地近くの追悼記念館でのこと。同館には3年前に“禎子さんの折り鶴”が寄贈されたことから佐治さんも訪問した。「案内の方が、私に『アメリカの悲劇も日本の悲劇もどちらも同じ悲しみを背負っている。私も同時多発テロで息子を亡くした。私はアメリカ

でも“禎子の折り鶴”を平和のシンボルにしたいと考えています』と話し、式典に誘われた。この会で禎子さんの兄・雅弘さんに会えたのです。雅弘さんは、『麻希ちゃん、来てくれたんかい』と抱きしめられて、『どんなに遠くに離れていても、禎子の魂がこうして引き合わせてくれるんだね』と泣いていた。『禎子は原爆によって命を奪われたかもしれないが、アメリカによって命をつないでもらった。禎子が折っていた折り鶴の紙は、アメリカの特効薬の包紙だった。僕はもう国は恨んではいない。戦争を引き起こした人間の心の弱さが間違っていたんだ。だから許しあう気持ちが必要ならば、真の平和を迎えることはできないよ』と話してくれました」と秘話を披露した。そして、「大事な肉親を奪われたお兄さんが、戦争を知らない私に『国を恨んではいけない、許し合いの心が一番大切だよ』と言ってくれた。どれほどの苦しみを乗り越えたのか。真剣に向き合って、頑張っただけ伝えなければいけないなと思った」と強調した。

### 戦争の芽である“いじめの芽”を止めたい

佐治さんは、「なぜ、思いやりが大事かと云うと、私は長い間、いじめにあっていました。とても辛かったが、でも、おじいちゃんの存在がありました」と語りだした。佐治さんの祖父は、戦時中は通信兵として激戦地のビルマに召集され、戦後は僧侶と中学校の先生の傍ら、サイパン、テニアン、沖縄、硫黄島など南方の激戦地で遺骨収集の活動を続けた。この祖父の姿を通して、自らの足で行動する大切さを学んだという。学校でのいじめは続いていたが、「祖父は、私が小学校3年の時に亡くなってしまい、悲しくて孤独になった。苦しくて生きている意味がないのではと、学校の校舎から飛び降りようと思ったんです」と回想した。「柵を乗り越えて、これで楽になれると考えて手を離そうとした時、一年前に見た禎子さんの折り鶴が頭に浮かんだ。『そうだ、禎子さんは生きてくても生きることができなかった。禎子さんが行くことができなかった学校にも通わせてもらっている。私が短い命を落とすとしたら、禎子さんが悲しむな、死ぬのではなく、禎子さんが伝えきれなかった思いを、精一杯伝えていければいい。そう思って、飛び降りるのを止めました。今でもこうやって伝えていること、それは禎子さんが第二の人生、第二の命を私に授けてくれたから、私にここに居ることができるのだと思っています』と語った。

最後に「禎子さんの話を知ってもらい、いじめの芽を止めたいと思って紙芝居を作った。戦争の芽である“いじめの芽”を止めたい。どうか皆様も、思いやりを持って、涙ではなく笑顔で生きること、これからの人生を歩んで行ってくれたら嬉しいなと思います」と、参加者に語りかけて、会は終了した。

この催しには、小中学生も含め80人が参加し、アンケートには「学校で戦争の話聞いて、平和とは何かを勉強したく参加した。分かりやすく戦争の怖さがわかった」(小学生・女子)、「小学6年の担任で子供達と平和について考え、その時に広島でサダコさんのことを知り、“平和とは何かを考えたい”と生徒に伝えました。この企画はとても素敵なことだなと思いました」(40代・女性)などの感想が寄せられた。

## ■夏休み 各種体験教室を開催

放送各社の協力および諸団体の助成を受け、今年も小中学生向けの各種体験教室を以下のとおり実施した。

### ＜放送文化基金助成事業＞

7月24日と25日、小4～6年生を対象に、フジテレビとNHK日本語センターのアナウンサーが発声練習や原稿読みを指導し、放送ライブラリー内のニューススタジオでキャスターやリポーター体験をする「アナウンサー体験教室」を4回開催した（参加者60人）。また、7月29日、小5～中3年生とその保護者を対象に、テレビ朝日『クレヨンしんちゃん』のムトウユージ監督と制作スタッフが「アニメができるまで」について話し、アフレコ体験を行う「親子出前授業@テレ朝」を開催した（参加者37人）。

### ＜子どもゆめ基金助成事業＞

7月19日、小4～6年生とその保護者を対象に、日本テレビのスタッフが放送技術の面から番組作りについて話し、中継車などの放送機器に触れられる「日テレ体験教室」を2回開催した（参加者145人）。また、8月19日、小4～6年生と中学生を対象に、FMヨコハマのスタッフが、実際に使われているスタジオで生放送体験やミニ番組作り、効果音作りを指導する「ラジオ・DJ体験教室」を開催した（参加者26人）。



## ■「赤毛のアンと世界名作劇場の仲間たち」展

8月8日～9月15日「赤毛のアンと世界名作劇場の仲間たち」展を開催。アニメ台本、セル画展示の他「世界名作劇場」から14作品の上映会を行った。NHK『花子とアン』の放送で「赤毛のアン」が再び注目を集めたこともあり、特に同作の人気の高さが伺えた。来場者からは「親子で楽しめた」や「NHKドラマとの対比ができた」などと同時に、「世界名作劇場」の放送を懐かしむ声が多数寄せられた。



## ■企画展「ケロロ軍曹ワールド ケロロの宇宙大冒険」

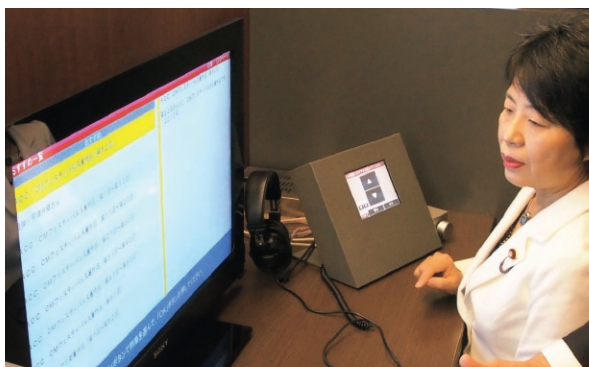
6月20日～8月3日、企画展「ケロロ軍曹ワールド ケロロの宇宙大冒険」を開催。キャラクターの立像や、原作者・吉崎観音のネーム原稿などを展示。またぬりえコーナーも盛況で、連日多くの来場者が長時間滞在し、ぬりえに没頭する姿が見られた。7月26日にはケロロ軍曹との記念撮影・握手会も行われ、熱心なファンが多数詰めかけた。



## ■上川前総務副大臣が放送ライブラリーを視察

7月10日（木）、上川総務副大臣が放送ライブラリーを視察に訪れた。初めに10階の応接室で工藤専務理事、松館常務理事から挨拶を受け、続いて、放送番組センターの事業概要に関する工藤専務理事からの説明を熱心に聞かれた。その後、8階の視聴ホールに移動し、番組を貯蔵しているHDDサーバーのVODシステムの説明を受け、視聴ブースでは、実際にCMを、放送当時を懐かしみながら視聴された。

引き続き、9階・展示ホールで、常設展示と企画展示をご覧いただいた。



常設展示では、プレイバックシアターで、テレビ放送開始からの時代を代表する番組や重大ニュースのハイライトシーンを、大型スクリーンで最初から最後まで楽しまれ、ニューススタジオでは、アナウンサーを体験、実際にニュース原稿を読まれた。また、「放送のしくみ」では、ラジオ・テレビ局から番組が家庭に届くまでのしくみ、放送局の仕事などについて説明を受けられた。

企画展示では、イベントホールと映像ホールで開催中の「ケロロ軍曹ワールド ケロロの宇宙大冒険」展を回られ、原作者のネーム原稿や複製原画、アニメの絵コンテなどの資料について、担当者の説明を熱心に聞かれた。およそ1時間半の放送ライブラリー視察であった。

### ■BL・クリエイター支援サービス利用状況

本格運用開始から10月20日までの利用状況。

◇配信番組数：テレビ番組2,745本、ラジオ番組744本

◇利用登録者数：462人（92社）、IPアドレス登録131社

◇視聴実績：テレビ番組 769回、ラジオ番組 98回

今後も本サービスの充実を図り、放送局員への利用を促進していく。利用方法など本サービスについてのお問い合わせは、当センター業務課まで（TEL:045-222-2881）。